

平成 28 年度第 6 回（156 回）

清瀬市まちづくり委員会議事要旨

日 時：平成 29 年 1 月 17 日午前 10 時から

場 所：中清戸センター 会議室 2

出席者：新田斉、松里征男、原弘美、木村敏夫、西畑省二、築瀬忍、畑中卓純、
中村京子、富田ひろ子、後藤清、小苺米清弘、加藤カツエ、小西一午、
小寺喜裕、朝倉勇、菊谷有希子、戸口静江

事務局：市民協働係長、企画課主事

欠席者：藤井祐介、五十嵐玲子、齊藤忠之

<配布資料>

- 1 平成 28 年度第 6 回（第 156 回）清瀬市まちづくり委員会次第
- 2 東村山市社会福祉協議会平成 28 年度事業計画
- 3 清瀬市シルバー人材センター事業実施状況報告
- 4 東京都社会福祉協議会 社会福祉法人による取組み
- 5 清瀬市シルバー人材センター平成 28 年度 事業計画書
- 6 高齢者が活躍できる場と拡大するための自治体支援策に関する調査研究

1 開会

2 前回の確認

委員長：まずは議事要旨の確認から。気になる点はあるか。

事務局：富田委員のお名前が間違っていたので、訂正する。

3 提案の審議

委員長：小委員会について報告する。前回の議事要旨で提言の内容の骨組みを 3 つ上げたが、分かりにくいという意見から、②郷土博物館の資料の整理、③埋もれていく文化財の発掘をするために①郷土博物館と一般研究者とのつながりが希薄なためパイプ作りをする。という順番に修

正する。「文化財」という言葉を使うと狭まってしまうのではないかと
いう意見から、「市の歴史的な宝物」や「市の歴史的な遺物」と言ったよ
うな言葉にした方が良いのではないかと意見があった。また、提言す
るにあたり、骨格の部分の具体例を出した方がよいのか。抽象的な意
見で良いか。意見してほしい。

委員：まちづくり委員会で話し合っている内容は「市史研究第1号きよせ」
に載っている。まだ「市史研究第1号きよせ」を読んでいない委員は
読むことを進める。先ほど委員長は「文化財」という言葉は使わずに、
という発言があった。市民に自分の家や周りに「考古」が埋もれてい
ないか。埋もれていたりするなら、郷土博物館に連絡してほしいと「市
史研究第1号きよせ」に書いてある。我々が話し合っていることが、
二番煎じになってしまうのではと思う。このまま提言してしまうとま
ちづくり委員会の資質も問われてしまうように感じる。まずは委員に
「市史研究第1号きよせ」を読んでいただいてから、提言の文面を改
めるか、または提言しないかを検討した方がよいと思う。「市史研究第
1号きよせ」を読んで、そこまで議論する必要があると感じた。

委員長：目を通せる方は目を通していただきたい。もうひとつ「フォトミュー
ジウム清瀬」も詳しく載っているので、参考として見て頂けたらと思
う。

委員：「フォトミュージウム清瀬」は我々が提言しようとしている内容を写真
で残そうとしている。解説も載っていて分かりやすい。

委員長：小委員会では提言を前提に話し合っている。次回の小委員会は提言の
土台を作る予定であり、本会議で示す事が出来るので、「市史研究第1
号きよせ」「フォトミュージウム清瀬」に目を通していただき、次回の
会議ではご意見頂けたらと思う。

次の議題にうつる。「高齢者活用の件」だが、委員より近隣市の状況を
とシルバー人材センターの現状を確認して改めて話し合うということ
だった。配布した資料は東村山市の東京社会福祉協議会、東久留米市
の事例、清瀬市シルバー人材センター、八王子市の資料である。

委員：具体的な事案が提示されていて、非常に興味深い資料である。資料の
見方だが、提案内容を考慮してみないといけないと思う。そこで提案
内容の共通理解を深めたうえで、他の資料を見ないといけないと思う。
私の理解だが、今回の提案は高齢者が定年退職を迎えて、地域社会に
戻ってきて、地域社会に今まで身に付けたキャリアを活かしながら、
地域社会に貢献する方法を考えるという提案だったと思う。そこには
若干の報酬が発生する。その中に例として委員会の活用があったと思
う。若干の報酬をどのように考えるか。わずかな金額で良いという内

容だと思う。地域社会への貢献の形態は、いわば生活資金を得るわけではなく、お小遣い程度で良いと解釈した。雇用でなく社会参加だが、ボランティア活動ではない。若干の報酬を得て行う社会参加である。そのような提案だったと思う。そのように見るとシルバー人材センターの事業は就業を準備する組織なのか。社会参加を準備しているのか。社会参加なので報酬を低く抑えているのか。他市を見ると八王子の市民塾は市の委託事業でなく、市民のボランティア活動だと思う。今回の提案と比較すると、ボランティア促進を強調しているのではなく、若干の報酬が準備されという事である。また、そのような点では、東村山市は市の委託事業として行われていると思う。そういった観点のもと、高齢者の社会参加をすすめていると思う。そのような見方で、他市の事例を見た方がいい。

委員：清瀬市長期総合計画がある。その中に就労に関する情報を行いますと謳われている。これに関してはどこまで展開されているのか教えて欲しい。

事務局：ここでの「就労」は若者等も入ってくる。

委員：「就労」と言った場合は収入の獲得を目的とした労働である。労働報酬を対価として働くのが就労である。今回の提案は収入を目的とした就労ではないと思う。社会参加または有償のボランティア等で理解している。

委員：まちづくりをどのように活かせるかを考えた。高齢者は地域社会に入ろうとしている。シルバー人材センターなど充実していると思うが入っていけない。人間として元気であれば活躍したいし、どこかで活動したい。逆に言えば自治体がそれを活用しない手はないと思う。経験や知識を活かしてもらえば、地域も本人もどちらも良くなると思う。ここでいう「働く」は「活動」という意味になる。この提案でハード面でなく、ソフト面のまちづくりに取り組めたらと思う。

委員：就労ではなく、その人の意思を尊重しながらという事になるが、この事を公的な機関ではやれないと思う。啓発運動はできると思うが。その場を提供するのは個人個人の問題であって、市がカバーしなさいというのは現実的に難しいと思う。公的な機関と個人との関係をよく考えたうえで検討しないと難しい。ハローワークを作ることに聞こえる。市にできる事は啓発運動までだと思う。

委員：定年した人が、何ができるだろうと考えたときに、委員会に参加するなどもあると思う。その委員会を市の所管でマネジメントしてもらえれば良いと思う。高齢者からしたら活躍の場になると思う。

委員：委員会の数は多くある。あなたはここの委員会にきてくださいという

のは公的な機関がやるべきことではない。

委員：決めてあっても、決められた通りになされないとか、もう少しスピードをもってもらいたいとか、実行してもらいたいとか、いろいろあると思う。そういう事に関して、市民が満足していないということで、まちづくり委員として提言してもいいと思う。

委員：私は、あくまで個人の問題なので、個人の問題をまちづくり委員で扱うのはちょっと違うと思う。個人と公的機関に狭間があるので、それを埋めないといけないと思う。

委員：アイデアの1つとして委員会が出ているだけで、狭間を埋める方法は考えていない。

委員：高齢者でやる気がある人の活躍をどうするかを考える提案だと思う。それは国が考えている。コミュニティの場を作り参加する事が重要だと思う。委員会への参加を奨励するわけではない。元気な人が参加できるコミュニティを作るのが一番だと思う。元気な高齢者が活躍できるコミュニティを作るのが良いと思う。

委員：場がないから参加しないのか、意思がないから参加しないのか。無報酬で参加するのは3年が限界と聞いたことがある。

委員長：各委員より今回の提案に関して意見を願う。

委員：子供主体の意見になってしまうが、小学校でも高齢者の方が「サタデースクール」や「まなべー」といった形で子供たちを見てくれている。ボランティアか有償なのかわからない。子供と現役を引退された方が交流できる場が増えれば外に出る機会も増えて良いと思う。

委員：無償で行うのは3年が限度という話があった。委員会形式で少ない報酬があれば良いと思う。少ない報酬だと会場費やその場で出す飲み物代でなくなってしまうかもしれないが、それでもいいと思う。有償だとシルバー人材センターやハローワークがあると思う。

委員：今回の提案は社会参加のあり方の一環として考える。現状は基本的にできていると思う。シルバー人材センターや老人クラブを活用した方が良いと思う。社会参加のコミュニティを作っていくのが良いと思う。

委員：市として高齢者をどのように活用するか。目には見えないが、活用された側も健康寿命が延びるのではないかと思う。私は高齢者の活用の一つとして、今回の提案には賛成である。

委員：今回の提案の前半は賛成だが、後半は違和感がある。前半とは「取得したキャリアを使って地域貢献や社会貢献する」というところである。しかし、具体例として挙げられている「市の委員会を増やす」ところには違和感がある。今でも市の委員会は十分にある。更に増やすとなると、市の負担と財政的に厳しい。若者から見たら、税金で高齢者の

活躍のために使われるのは疑問があるのではないかと思う。また、委員会だとハードルが高く参加できない高齢者の方から反感をかうかもしれない。今回配られた八王子市の資料のように高齢者の方が自分で委員会のようなものを立ち上げ活動するケースもありだと思う。

委員：紙芝居サークルを立ち上げに参加した。会長は高齢になり、「何か役に立ちたい」と思いサークルを立ち上げた。最初は無名だし無償だった。活動を続けて行くうちに会長の思いは伝わり、現在は老人ホーム、私立保育園など14カ所を回っている。まわる度に人を元気にするつもりが、自分が元気になっていると会長は言っていた。市民活動センターではボランティア団体の登録し、団体費を払えば会議室も使える。他のボランティア団体との交流会もある。清瀬を盛り上げたいと思う高齢者の方が多く集まっているので、そこをもっと活用していけたらよいと思う。

委員：定年後何かしたいと思っても、何をしたいかわからないと思う。まず、アイデアを出すのが大切だと思う。何か気になる事を意見として出し合っていることが大切だと思う。高齢化の仕事について考える前に、アイデアを持ちあうのが大切だ。

委員：シルバー人材センターでも生活のための就労は難しいと思う。社会参加のための若干の収入がシルバー人材センターだと思う。

委員：個人店の廃業が増えてきている。若者が後を継げない。自治会も高齢化が進んでいる。女性は委員会等に出てきている印象だが、男性はなかなか委員会などには入っていない印象である。しかし、声をかけ合って、横のつながりをひろげている。仕事より、まずは顔の見られるつながりを強めることが重要だと思う。

委員：高齢者は個人の価値観を持っている。自分が高齢者だから言わせていただくが、高齢者は自己責任で生活していくべきだ。もっと若い世代に目を向けた方がいい。

委員：250人の会員がいる団体組織にいる。市と協働して、カタクリまつり等を行っている。そこに高齢者がずっと働くのは大変であって本人のやる気しだいだと思う。感心を持つなら自分から動くべきだ。何かをやっていると注目してくれる人もいるし、行政にも意見ができる。自分から動いていかないといけない。行政から言われる事を提言しても意味がないと思う。

委員：可能であれば「清瀬モデル」として今回の提案を提言できないかと思っている。

委員：まずは社会参加をどうしたらよいかを考えるべき。もし、提言であれば、我々で市ができるような内容まで話し合ってから方が良いと思う。

市は提言した内容に関してはしっかり対応してくれているからである。

委員：高齢者はそれぞれ違う。自分で同好会や趣味の会などに参加する自由は持っている。先ほども意見としてあったが、私も提案の内容の前半は賛成だが、後半は違和感がある。自分の意思が大切であって自分が参加しなくなったら、そこまで。参加しない人が悪いわけではない。

委員：高齢化が大変だと言うが何が大変なのか。元気な人は自分で行わないといけないと思う。「意識改革」と意見が出てきていたが、突き放す意味ではない。定年があり、会社を退職した人たちは、起業するにも、就職するにも、地域に参加するにも自分で考えてやるしかない。それが高まっていけば、甘い考えになるかもしれないが、行政がバックアップしてくれる体制にもなると思う。突き放すのでなくて、これからの社会でいかにして自分をアピールするかだと思う。

委員：元気でいてほしいと思うので、子ども、母、高齢者支援に対して何かあるかを調べていきたい。そのなかで新しい何か支援があれば行っていきたい。

委員長：皆さんの意見を聞いていると提案の前段については賛成だが、後段については難しいのではとお考えのようだ。次回の会議では回答にするか、提言にするか、結論に近い部分の意見を持ってきてもらいたいと思う。

次回は2月21日（火）午前10時～ 中清戸センター 第2会議室